

トロッコ

あくたがわりゆうのすけ
芥川龍之介

おだわらあたみかん けいべんてつどうふせつ こうじ はじ りょうへい やつ とし りょうへい まいにちむらはず
小田原熱海間に、軽便鉄道敷設の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。良平は毎日村外
れへ、その工事を見物に行った。工事を——といったところが、唯トロッコで土を運搬する——そ
れが面白さに見に行ったのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇んでいる。トロッコは山を下るのだから、人手
を借りずに走って来る。煽るように車台が動いたり、土工の袷天の裾がひらついたり、細い線路が
しなったり——良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思う事がある。せめては一度
でも土工と一しょに、トロッコへ乗りたいと思う事もある。トロッコは村外れの平地へ来ると、自然
と其処に止まってしまう。と同時に土工たちは、身軽にトロッコを飛び降りるが早いのか、その線路
の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、もと来た山の方へ登り始め
る。良平はその時乗れないまでも、押す事さえ出来たらと思うのである。

あるゆうがた、——それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、
トロッコの置いてある村外れへ行った。トロッコは泥だらけになったまま、薄明るい中に並んでい
る。が、その外は何処を見ても、土工たちの姿は見えなかった。三人の子供は恐る恐る、一番端に
あるトロッコを推した。トロッコは三人の力が揃うと、突然ごろりと車輪をまわした。良平はこ
の音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかった。ごろり、ごろり、
——トロッコはそう云う音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登って行った。